

2.1.6 偕楽園

指定名称 常磐公園

保護・文化遺産の種類 記念物（史跡・名勝）

教育遺産の類型 その他（修学の休養の場としての庭園）

指定等により保護されている面積 110,478 m²（本園・文化財保護法）

25,916 m²（桜山・都市公園法）

2,099 m²（丸山・都市公園法）

合計 138,493 m²

(1) 概要

水戸藩第9代藩主徳川斉昭は、「心身の安寧なくしては学業成就はおぼつかない。」との信念から、天保13(1842)年に弘道館と対をなす教育施設として偕楽園を開園した。名称は斉昭自撰の「偕楽園記」に記された「衆（領民）と偕（とも）に楽しむ」を由来とし、毎月「三」と「八」が付く日は領民に園が開放された。



写真 2-41 偕楽園（好文亭）

孟宗竹林・大杉森と梅林は、北の表門とそ

れに続く土塁によって、中央で区切られている。自然の万物は陰陽の理に従うという斉昭の信条から、陰陽思想に基づいて、大杉森・孟宗竹林を「陰の世界」、梅林を「陽の世界」として対置した。表門から入り、一ノ木戸をくぐって大杉森を抜けると一面に梅林が広がる。斉昭は学問の縁の深い梅の花を好み、当代屈指の梅林を整備した。

梅林が広がる台地の南端に、好文亭を建て、偕楽園を学問興隆の象徴とした。また、好文亭には水戸城の中屋敷から移築したと伝わる奥御殿が接続する。

奥御殿の東脇には、開設の主旨を記した偕楽園記碑が設置され、「一^{いっ}張一^し弛」（緊張と休養）の文字が刻まれた。これは修学の場（一^{いっ}張の場）としての弘道館、休養の場（一^し弛の場）としての偕楽園を意味し、文武に励む一方で、人には慰楽や休養することも必要であると説く。また、本園部の西側には茶屋の一遊亭があった桜山部と光圀時代に建てられた淵明堂という小祠が存在した丸山部が広がり、西側からの広い眺望も観賞の対象とされた。

偕楽園は学問や勤労を離れて単なる「弛^{ゆる}む」場であったのではなく、孟宗竹林や大杉森、梅林や桜山、千波湖を含む自然環境の中に身を置くことによって修養を深め、弘道館とともに「六芸」を実践する場でもあった。

明治以降も偕楽園は憩いの場として水戸の人々に愛され、初春に咲き誇る梅は水戸の風物詩となり、学問を奨励する斉昭の意思を今に伝えている。



図 2-7 偕楽園の指定範囲と主な構成要素

(2) 主たる構成要素

※P50 表 2-6 参照

ア 当初建造物

① 偕楽園記碑

斉昭の自撰自筆による「偕楽園記」が記された石碑である。石碑は、天保 13(1842)年の偕楽園開園に先立ち、天保 10(1839)年に建立され、「偕楽園記」の 4 文字と偕楽園設立の精神が 600 余字にわたって記されている。記には、斉昭の宇宙観や人生観、偕楽園開園の目的や園名の由来等が記されているが、その中でも特に偕楽園記の趣旨を表す言葉が「一張一弛」である。これは、弘道館と偕楽園は学問と休養の場として対をなすことが記され、開園当時から偕楽園が教育施設として位置づけられていたことを示す。碑文の書体には風格ある篆書体^{てんしよたい}が採用され、碑面の上部と左右には偕楽園の象徴と言ふべき梅の木の様を配している。弘道館記碑とは対照的に、抑制された流麗さを表現することで景観に溶け込ませている。また、弘道館記碑に用いた寒水石とは異なり、目立たず風雨にも強い伊豆石（安山岩）を使用している。



写真 2-42 偕楽園記碑

② 表門

園内のほぼ中央で、北面の園外道路からやや入った位置に東面して建ち、園の正門としての役割を持つ。木部は松煙塗で「黒門」とも呼ばれる。扉付で切妻造、茅葺とし、冠木門^{かぶきもん}の形状に見せかけた腕木門である。板扉が付いた格式ある門で、正

客やその他の出入りに際して使用された。左右に取り付く2間の袖塀は棧瓦葺となっており、園の外縁に巡らされている土塁に連なる。昭和20(1945)年の戦災を免れ、創建当初の姿を保つ。



写真 2-43 表門

③ 一ノ木戸門

表門の後方にやや離れて平行して建つ柿葺の腕木吹き抜け門（扉を持たない）の簡素な門である。この門を奥に進んでいくと先方が樹林や竹林が中心となる区域となっており、好文亭・奥御殿に通じている。

④ 中ノ門

園内のほぼ中央にやや北を向いて建つ茅葺の腕木門で、開門と脇塀がある。切妻形であるが、妻の破風板が起破風となる珍しい形の門である。この破風の拌み（材の接合位置）にある懸魚^{げぎょ}は、意匠や彫工手法に創建時の特徴をよく留める。好文亭・奥御殿に通ずる門で、昭和20(1945)年の戦災を免れ、創建当初の位置に建つ。

⑤ 大杉森・孟宗竹林^{もうそうちくりん}

東西270m、南北110mと偕楽園の西側の大部分を占め、樹齢200年以上の杉の大木が林立する。林床はクマザサ・オカメザサである。また、京都山城から移植されてきた孟宗竹の純林が配されている。表門・一ノ木戸門を潜り、奥に進むと来園者が目にするのは大杉森の亭々とした巨幹と孟宗竹林が織りなす静寂の空間である。さらに歩を進め、中ノ門・芝前門を潜ると、美しい梅林に出る。こうした表門から大杉森・孟宗竹林を経て梅林へと辿る道筋は、「清陰幽邃^{せいいんゆうすい}」と呼ばれ、その明暗変化の妙、陰陽の対比は、斉昭の作庭思想によるものといわれている。



写真 2-44 大杉森・孟宗竹林

⑥ 梅林

東西340m、南北200mと偕楽園の東側の大部分の面積を占め、創設当初は、200余品10,000本の梅を誇る、当代随一の梅林の一つであった。斉昭は、まず天保5(1834)年に、城下に隣接した神崎町^{かみさきちょう}に梅を多数植え、この梅林を基盤として、弘道館と不即不離^{ときわ}の教育施設として偕楽園を創設した。明治6(1873)年に常磐神社を創

建する際、梅林の東側約 11,000 坪(36,300 m²)を割譲した。現在の梅林の面積は東西梅林 3.3 ヘクタール、南崖斜面梅林 0.9 ヘクタールの計 4.2 ヘクタールで、約 100 品種 3,000 本の梅が植えられている。

⑦ 土塁

偕楽園の北側に面する旧岩間街道（現在の好文亭表門通り）沿いの境界施設である。土塁の総延長は約 350m で、土塁高は 0.8～1.0m 程度を測り、土塁上にはシイ、エノキ、コブシ、ハリエンジュ、シンジュ、サクラ等が植栽され、庭園の周辺景観に溶け込むように配慮されている。「偕楽園図」、「好文亭四季模様之図」を見ると、土塁上に築地塀等の遮蔽構造物は描かれておらず、植栽とみられる樹木が等間隔に植えられているだけで、高さからみても、この土塁は防禦のためではなく境界施設として構築されたと考えられる。

園内中央にも表門の袖塀に取り付く土塁から南東方向に約 170m の土塁が接続して伸びる。「偕楽園図」、「好文亭四季模様之図」は、築地塀等の遮蔽構造物は描いていない。この土塁もまた、等間隔の植栽を伴って、梅林と大杉森の領域を区切る構造だったと考えられる。

⑧ 吐玉泉

偕楽園造園前の七面山しちめんざんの時代から湧き出ていたものを利用し、崖を掘り込み、湧水樋を埋めてその量を増やし、御用石である寒水石（現常陸太田市真弓山から産出する大理石）の井筒を造って据えた泉水である。吐玉泉から湧き出る水は枯渴したことがなく、好文亭内の茶室である何陋庵かろうあんの茶席で用いられた。

⑨ 水戸八景 偃湖暮雪碑

偃湖暮雪とは、斉昭が選定した水戸藩内の景勝地「水戸八景」の一つで、石碑は偕楽園の南側斜面上の千波湖を一望できる場所に位置する。偃湖とは、偕楽園の借景である千波湖を指す。斉昭は北宋の瀟湘八景を模し、天保 4 (1833) 年に水戸八景を選定した。翌天保 5 (1834) 年以降には各所に石碑が建てられ、斉昭自らが筆書した銘が刻まれた。碑は周囲の景観に溶け込ませるため、自然石を利用している。また、八景すべてに碑を建てて、その碑を通過点として藩士の心身鍛錬を推奨し、武芸教育とともに景観を楽しむ情操教育の一環として位置づけたといわれている。

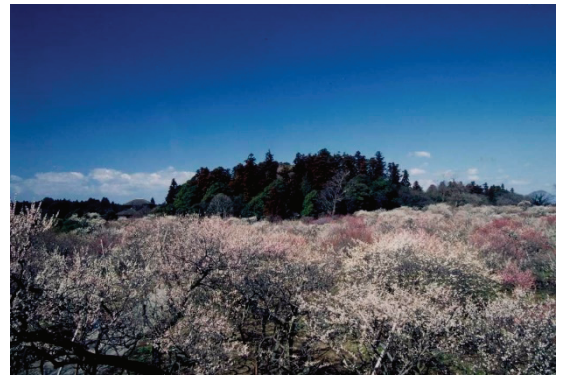


写真 2-45 梅林



写真 2-46 偃湖暮雪碑

⑩ 桜山・丸山

桜山は、長さ 360m、幅 40～110mの南北に伸びた頂部尾根の高台と山裾の玉龍泉を含む狭い水路及び急斜面地から構成される。頂部の尾根上の台地と急傾斜面地の上部は、桜の苑となっており、作庭時の面影を残している。中心部にかつて休息所である一遊亭が建っていた。

丸山は、東西 60m、南北 40m、高さ約 6 mほどの半球状の小さな丘で、桜川の掘削土を盛ったとされている。第 2 代藩主光圀の時代には^{えんめいどう}淵明堂という小祠が建てられていたと伝えられるが、その痕跡は地表からは確認できない。

イ 復元建造物（昭和 33(1958)年～平成 6(1994)年復元）

偕楽園は太平洋戦争のさなか、昭和 20(1945)年 8 月の水戸空襲で被害を受け、多くの建造物が焼失した。そのため、焼失前に作成した見取図や実測図、さらには古写真などをもとに戦後に再建した。

① ^{こうぶんてい}好文亭

斉昭自らの設計による数寄屋風の木造 2 層 3 階建ての建造物である。園内の高台に建ち、特に三階は「^{らくじゅうろう}楽寿桜」と呼ばれて三方に視界が開け、千波湖や筑波山を望むことができた。名称は「^{こうぶんぼく}好文木」という梅の異名に由来する。弘道館の学生、領民の修養の場として建築され、斉昭による詩会や茶会、藩内の高齢者を招いた敬老の宴等にも用いられた。



写真 2-47 好文亭

南に面して見晴らしの良い大広間が 2 室、さらに借景を眺望できる 3 階の座敷を備え、料理の間や当時では珍しい運搬昇降設備が備わる。軒を高くすることで室内からの眺望に意が図られ、外部との間仕切りはすべて明障子とするなど開放感のある空間となっている。屋根は^{こけらぶき}柿葺の^{よせむねづくり}寄棟造で、四方から正面・裏面の区別を避け、園内や遠方からの眺望が意識されている造形である。

好文亭 1 階には茶室「^{かろうあん}何陋庵」が付属する。葺平屋の四畳半の草庵風茶室で、^{にじり}躡口がない代わりに藩主や客人のための貴人口が設けられている。あわせて、茶会に招かれた客が席入りの準備や連客との待ち合わせに用いられた「待合」があり、軸部材には櫟の皮付き丸太が使用された数寄屋造とし、切妻造の茅葺屋根で、露地に建つ待合に相応しい形式・構造である。

② ^{おくごてん}奥御殿

偕楽園の開園後に中屋敷の建造物を移築及び増築した建造物であり、明治 2(1869)年に斉昭夫人（^{ていほういん}貞芳院）の居所として一部を増築したとの記録がある。南棟、中棟、東棟の 3 つから成る複雑な構造の平屋建で、屋根は南棟と中棟が茅葺、東棟は柿葺となっている。公的な玄関がない別邸的な御殿建築で、並列する各間の

周囲に縁側を廻らし、採光と通風を図り、庭園を觀賞するという保養を目的とした建造物であったと考えられている。

昭和 44 (1969) 年の落雷で再度焼失した (好文亭には延焼せず) が, 昭和 48 (1973) 年に再び復元した。

③ 芝前門・露地門・櫨門

芝前門は中ノ門の東方 25m の位置に建つ数寄屋風の門で, 梅林や庭園区域から好文亭区域へと入る境に建てられた。

露地門は待合に隣接する杉皮葺の腕木門で, 茶事に水を用いる吐玉泉に向かう園路へ続く。

櫨門は好文亭の東方遠路から崖下の南方に至る通路上に建てられた杉皮葺で櫨丸太造の門である。間口が約 1.9m と最も小規模な門である。

このうち櫨門は, 平成 6 (1994) 年蟻害で倒壊したため, 再び復元した。



写真 2-48 奥御殿

表 2-1 足利学校の主たる構成要素

(ア) 当初建造物

名称等	所在地	建築年代	桁行 柱間 (m)	梁間 柱間 (m)	建築 面積 (㎡)	構造/形式	屋根	外壁	指定等
入徳門	足利市 昌平町 2338番	寛文8 (1668)	2.29	1.57	3.59	高麗門, 切妻造	棧瓦葺	板	史跡附
学校門			3.03	1.71	5.17	高麗門, 切妻造	本瓦葺	板, 漆喰	
杏壇門			3.00	2.50	7.51	四脚門, 切妻造	棧瓦葺	板, 漆喰	
大成殿 (孔子堂)			9.09	7.28	66.18	一重裳階付, 寄棟造	本瓦葺	板	
正一位 霊 驗稻荷社	昌平町 2339番	天文23 (1554)	5.58	3.70	20.65	【本殿】 神明造	茅葺型 銅板葺	板	—
			5.15	3.64	18.75	【拝殿】 切妻造	流し板・ 板目銅板葺		—
堀・土塁 【西半分】	昌平町 2338番	中世	【西半分】 土塁幅約 7.2m, 土塁総延長約 97m, 土塁高約 2.2m, 西堀幅約 8.2m, 深さ約 2.0m, 比高差約 4.2m						史跡
			【南西部】 土塁幅約 8.4m, 土塁総延長約 43m, 土塁高約 1.8m, 南堀幅約 8.5m, 深さ約 1.9m, 比高差約 4.3m						
			【北西部】 土塁幅約 5.0m, 土塁総延長約 64m, 土塁高約 0.8m, 堀幅約 9.1m, 深さ約 2.3m, 比高差約 4.2m						
歴代庠主 の墓	昌平町 2338番	寛延2 (1749) 以前	【墓域】 東西 11m, 南北 2.2m 無縫塔などの墓石が 20 基並ぶ				—	—	—
松川東山 の墓碑	昌平町 2338番	寛政8 (1796)	高さ約 1.3m, 幅 72cm, 奥行 28.8 cm				—	—	—

(イ) 復元建造物（平成2（1990）年復元）

名称等	所在地	建築年代	桁行 柱間 (m)	梁間 柱間 (m)	建築 面積 (㎡)	構造/形式	屋根	外壁	指定等
方丈	足利市 昌平町 2337番 2340番	寛文8 (1668)	17.18	10.71	184.01	寄棟造	茅葺	板, 漆喰	—
庫裡			18.14	8.83	160.18	入母屋造 ・寄棟造	茅葺	板, 漆喰	—
書院			8.59	5.33	45.81	切妻造	橡葺	板, 漆喰	—
衆寮		寛延2 (1749) 以前	14.54	4.55	66.10	切妻造	橡葺	板, 漆喰	—
木小屋			9.55	3.82	36.44	寄棟造	茅葺	板, 漆喰	—
土蔵			5.73	3.82	21.86	切妻造	橡葺	漆喰	—
裏門			2.42	1.67	4.04	切妻造	茅葺	板, 漆喰	—
南庭園		宝暦年間 (1751～ 1764) 以前	【池】 東西 30m, 南北 15m, 深度 0.45～0.5m 築山泉水庭園						—
北庭園			【池】 東西 19m, 南北 20m, 深度 0.45～0.5m 築山泉水庭園						—
堀・土塁 【東半分】		中世	南土塁幅（南東復原土塁）約 6.0m, 土塁高約 2.03m, 南堀幅約 7.2m, 深さ約 0.8m, 比高差約 2.8m						—

※すべての建造物等が史跡の範囲内である。

※木造建造物の桁行柱間寸法・梁間柱間寸法は、両端柱間の芯々の数字である。

表 2-2 閑谷学校の主たる構成要素

(ア)当初建造物

名称等	所在地	建築年代	桁行 柱間 (m)	梁間 柱間 (m)	建築 面積 (㎡)	構造/形式	屋根	外壁	指定等
講堂	備前市閑谷 742	元禄 14 (1701)	19. 43	15. 62	303. 77	入母屋造	本瓦葺	棧唐戸	国宝
小斎		延宝 5 (1677)	8. 74	5. 74	40. 06	入母屋造	柿葺	漆喰	重要文化財
習芸斎 及び飲室		元禄 14 (1701)	13. 72	6. 96	131. 67	入母屋造	本瓦葺	漆喰	
文庫		延宝 5 (1677)	9. 73	3. 99	44. 79	土蔵造 切妻造	本瓦葺	漆喰	
公門附 左右練堀		元禄 14 (1701)	2. 95	1. 61	4. 73	一間薬医門	本瓦葺	板 漆喰	
聖廟		貞享元 (1684)	5. 91	5. 91	115. 97	大成殿附 聖龕 入母屋造	本瓦葺	板 漆喰	
			3. 34	1. 97	21. 76	東階・西階 切妻造	本瓦葺	板	
			3. 95	5. 91	77. 22	中庭 入母屋造	本瓦葺	漆喰 板	
聖廟 厨屋 繁牲石		貞享元 (1684)	3. 78	3. 09	38. 59	厨屋 土蔵造 切妻造	本瓦葺	漆喰	
			—	—	—	繁牲石	—	—	
聖廟 文庫		貞享元 (1684)	3. 94	2. 98	38. 78	土蔵造 切妻造	本瓦葺	漆喰	
聖廟 外門 練堀 石階		貞享元 (1684)	1. 95	1. 50	—	外門 四脚門 切妻造	本瓦葺	—	
			—	—	—	練堀	本瓦葺	漆喰	
			—	—	—	石階	—	—	
校門（鶴 鳴門）附 左右練堀 石橋		貞享元 (1684)	4. 30	2. 95	—	切妻造	本瓦葺	板 漆喰	
閑谷神社 （旧閑谷学 校芳烈祠）	閑谷 748	貞享 3 (1686)	3. 94	4. 81	62. 67	本殿（芳烈祠） 入母屋造	本瓦葺	漆喰 板	
			4. 42	1. 70	7. 51	幣殿（階） 切妻造	本瓦葺	板	
			3. 94	3. 94	15. 52	拝殿（中庭） 入母屋造	本瓦葺	漆喰 板	
		閑谷神社 神庫	貞享 3 (1686)	3. 52	2. 54	29. 55	土蔵造 切妻造	本瓦葺	漆喰
		閑谷神社 中門（外門） 練堀 石階	貞享 3 (1686)	1. 91	1. 57	—	中門 四脚門 切妻造	本瓦葺	—
				—	—	—	練堀	本瓦葺	漆喰
—	—			—	石階	—	—		
石堀 附 飲室門	閑谷 740, 742, 748, 750	元禄 14 (1701) 頃	総延長764. 85m幅 1. 8m 高さ 2. 1m （外側地盤から）					—	

火除山	閑谷 741, 742	近世	—	—	14,388	高さ約 7 m (石垣上面から)	—	—	特別史跡 ・名勝附
泮池	閑谷 745	近世	—	—	737	幅 7 m 長さ 100m	—	—	
椿山	閑谷 750	元禄 15 (1702)	—	—	4,474	—	—	—	
黄葉亭	閑谷 821	文化 10 (1813)	4.38m	3.75m	81.53	宝形造	茅葺	—	
石門	閑谷 609-3	元禄 10 (1697)	現 高1.3m, 総 高3.8m 創立当初高3.3m				—	—	
津田永忠 宅跡	閑谷 801, 800	宝永元 (1704)	—	—	1543	—	—	—	

※すべての建造物等が特別史跡の範囲内である。

表 2-3 咸宜園の主たる構成要素

(ア) 当初建造物

名称等	所在地	建築年代	桁行 柱間 (m)	梁間 柱間 (m)	建築 面積 (㎡)	構造/形式	屋根	外壁	指定等
秋風庵	日田市 淡窓 二丁目 100-1 他	天明元 (1781)	16.74	6.93	136.10	一部2階建 寄棟造	茅葺	色土中塗 仕上げ	—
遠思楼		嘉永 2 (1849)	5.96	2.98	17.75	2 階建寄 棟造	桧瓦葺	色土中塗 仕上げ	—
風呂 便所棟		19 世紀 中頃	2.88	1.97	15.67	切妻造	桧瓦葺	中塗仕上 げ	—
書蔵庫		明治 23 (1890)	5.73	3.82	21.89	土蔵造 2 階建切妻造	桧瓦葺	—	—
井戸	淡窓 二丁目 296-2 他	文政 2 (1819)	—	—	—	—	—	—	—

(イ) 復元建造物（平成 22（2010）年復元）

名称等	所在地	建築年代	桁行 柱間 (m)	梁間 柱間 (m)	建築 面積 (㎡)	構造/形式	屋根	外壁	指定等
井戸屋形	日田市 淡窓 二丁目 100-1 他	天保 12 (1841)	1.09	1.09	4.66	棟門形式 の井戸屋 形切妻造	竹屋根	—	—

(ウ) 地下遺構

名称等	所在地	建築年代	桁行 柱間 (m)	梁間 柱間 (m)	建築 面積 (㎡)	構造/形式	屋根	外壁	指定等
東塾跡	日田市 淡窓 二丁目 100-1 他	文政 7 (1824)	(7.46)	(3.73)	—	—	—	—	—
梅花塙跡		天保元 (1830)	(3.85)	(2.33)	—	—	—	—	—
招隠洞跡		天保 3 (1832)	(9.46)	(5.69)	—	—	—	—	—

※すべての建造物等が史跡の範囲内である。

※桁行柱間寸法・梁間柱間寸法は、両端柱間の芯々の数字である。

※東塾跡・梅花塙跡・招隠洞跡の桁行柱間寸法・梁間柱間寸法は、『史跡咸宜園跡保存整備事業報告書』（日田市教育委員会，2016）の「東塾推定平面図」・「招隠洞・梅花塙推定平面図」の数字である。

※建築面積は側柱内側面積の数字，井戸屋形については，屋根竹外下角内側面積の数字である。

廣瀬淡窓墓説明

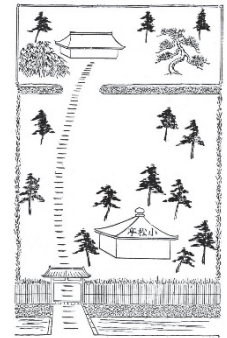
廣瀬淡窓は安政3(1856)年、75年の生涯を閉じた。この地は淡窓の弟三右衛門(棣園)が所有する別荘があり、生前からその場所を決めていた。別称は「長生園」、旭荘、青邨、林外、濠田などの咸宜園塾主とその家族13名が葬られ、塾主の墓銘には戒名が無く仏式とは異なる。また、淡窓の自撰による「文玄先生之碑」が建てられている。



写真 2-49 現在の廣瀬淡窓墓

法的保護、修理・整備の経緯

大正12(1923)年	文玄先生之碑保護のための覆屋が整備
昭和初期	文玄先生之碑と覆屋の移設
昭和23(1948)年	史跡指定
平成3(1991)年	庭園整備
平成25(2013)年	「廣瀬淡窓旧宅」の史跡追加指定に伴い名称を「廣瀬淡窓旧宅及び墓」に変更・統合



『凶禮記』に描かれている廣瀬淡窓墓

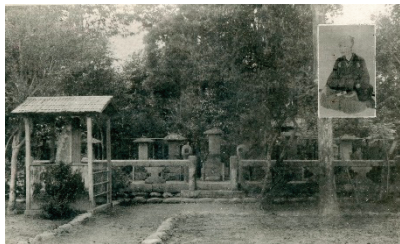


写真 2-50 大正時代の絵葉書に用いられた廣瀬淡窓墓
(「文玄先生之碑」が現在と異なる)



写真 2-51 昭和前半期の廣瀬淡窓墓
(「文玄先生之碑」が現在地に移っている) 財団法人廣瀬資料館蔵

表 2-4 豆田町の主たる構成要素

(ア) 当初建造物

① 長福寺本堂

名称等	所在地	建築年代	桁行 柱間 (m)	梁間 柱間 (m)	建築 面積 (㎡)	構造/形式	屋根	外壁	指定等
長福寺 本堂	日田市 豆田町 53 他	寛文 9 (1669)	14.1	16.2	276.16	入母屋造	本瓦葺	漆喰	重要文化財/ 重要伝統的建 造物群保存地 区特定物件
山門		19 世紀 前期	—	—	—	切妻造 四足門	本瓦葺	—	重要伝統的建 造物群保存地 区特定物件
鐘楼		安永 6 (1777)	2.8	2.8	7.84	入母屋造	本瓦葺	—	
経蔵		享保 20 (1735)	4.1	4.1	—	宝形造	本瓦葺	漆喰	
常灯明堂		享保 11 (1726)	6.2	4.1	24.0	寄棟造	本瓦葺	漆喰	
庫裡		明治 20 (1887)	9.05	27.15	—	入母屋造 2 階建	栈瓦葺	白漆喰	
土蔵		明治 20 (1887)	—	—	—	切妻造	栈瓦葺	漆喰	

※長福寺本堂・鐘楼・経蔵・常灯明堂の桁行柱間寸法・梁間柱間寸法は、両端柱間の芯々の数字である。

※本堂は、元禄 15 年，享保 7 年，文化 6 年，弘化 3 年，明治 7 年・20 年・28 年，昭和 2 年，34 年～36 年・39 年・54 年に、部分修理を行っている。

② 廣瀬淡窓旧宅

名称等	所在地	建築年代	桁行 柱間 (m)	梁間 柱間 (m)	建築 面積 (㎡)	構造/形式	屋根	外壁	指定等
主屋	日田市 豆田町 120-1 他	安政 3 (1856)	38.68	15.45	—	寄棟造 2 階建	栈瓦葺	中塗	重要伝統的建 造物群保存地 区特定物件
座敷		天保 4 (1833)	5.75	8.93	51.34	入母屋造	栈瓦葺	中塗	
新座敷		嘉永 6 (1853)	9.5	5.7	—	入母屋造	栈瓦葺	漆喰	
6 畳間		天保 9 (1838)	14.25	3.8	—	切妻造	栈瓦葺	中塗	
2 号蔵		嘉永 7 (1854)	9.5	3.8	36.1	切妻造 2 階建	栈瓦葺	漆喰	
3 号蔵		18 世紀 中頃	5.7	5.7	32.49	切妻造 2 階建	栈瓦葺	漆喰	
4 号蔵		天保 4 (1833)	5.7	3.8	21.66	切妻造 2 階建	栈瓦葺	漆喰	
南主屋	豆田町 116 他	文久 3 (1863)	7.6	9.5	—	切妻造	栈瓦葺	中塗	
隠宅		天保 13 (1842)	9.5	5.7	—	入母屋造	栈瓦葺	漆喰	
6 号蔵		文久 3 (1863)	14.25	3.8	—	切妻造	栈瓦葺	中塗	
7 号蔵		嘉永 2 (1849)	9.5	4.7	44.65	切妻造	本瓦葺	中塗	

③ 草野家住宅

名称等	所在地	建築年代	桁行 柱間 (m)	梁間 柱間 (m)	建築 面積 (㎡)	構造/形式	屋根	外壁	指定等
主屋店舗部	日田市 豆田町 127	安永 7 (1778)	13.7	14.1	182.7	切妻造 2 階建	棧瓦葺	漆喰	重要文化財 / 重要伝統的建 造物群保存地 区特定物件
主屋仏間部		18 世紀 中期	8.9	5.9	82.4	切妻造	棧瓦葺	漆喰	
主屋玄関部		18 世紀 後期	13.5	6.0	105.3	切妻造 2 階建	本瓦葺 棧瓦葺	鼠漆喰	
主屋新 座敷部		19 世紀 前期	8.8	6.3	65.8	切妻造	棧瓦葺	漆喰	
座敷蔵		享保 16 (1731)	15.8	6.6	104.0	切妻造 一部 2 階建	本瓦葺	漆喰	
主屋隠宅部		慶応 2 (1866)	6.7	5.7	48.7	切妻造	棧瓦葺	漆喰	
隠宅蔵		19 世紀 前半	11.8	5.2	62.9	切妻造 一部 2 階建	本瓦葺	漆喰	
北蔵		18 世紀 後期	15.8	6.9	110.1	切妻造 一部 2 階建	棧瓦葺	漆喰	
家具蔵		18 世紀 後期	6.8	4.1	40.1	切妻造	棧瓦葺	漆喰	

④ 旧千原家住宅

名称等	所在地	建築年代	桁行 柱間 (m)	梁間 柱間 (m)	建築 面積 (㎡)	構造/形式	屋根	外壁	指定等
主屋	日田市 豆田町 1-1 他	明治前期	17.19	20.81	—	寄棟造 一部 2 階建	本瓦葺	鼠漆喰	重要伝統的建 造物群保存地 区特定物件
座敷		明治後期	9.05	3.62	—	切妻造	棧瓦葺	漆喰	
座敷		大正	8.14	6.33	—	寄棟造 2 階建	本瓦葺	荒壁	
土蔵		明治 2 (1869)	5.43	3.62	—	切妻造 一部 2 階建	本瓦葺	鼠漆喰	
土蔵 (北蔵)		宝暦 7 (1757)	12.67	5.43	—	切妻造	本瓦葺	漆喰	
土蔵 (中蔵)		文政 9 (1826)	32.58	7.24	—	切妻造	本瓦葺	漆喰	
土蔵 (南蔵)		大正 7 (1918)	25.34	7.24	—	切妻造 一部 2 階建	本瓦葺	漆喰	
土蔵 (仕込蔵)		大正 6 (1917)	19.91	14.48	—	切妻造 一部 2 階建	棧瓦葺	漆喰	
土蔵 (麴蔵)		大正 8 (1919)	18.1	7.24	—	切妻造 2 階建	本瓦葺	荒壁	
土蔵 (精米蔵)		—	—	—	—	—	—	—	
土蔵 (穀蔵)		大正 8 (1919)	14.4	5.4	—	切妻造 2 階建	本瓦葺	荒壁	
土蔵 (焼酎蔵)		大正 10 (1921)	18.1	7.24	—	切妻造 一部 2 階建	棧瓦葺	荒壁	

⑤ 旧手島家住宅

名称等	所在地	建築年代	桁行 柱間 (m)	梁間 柱間 (m)	建築 面積 (㎡)	構造/形式	屋根	外壁	指定等
主屋	日田市 豆田町 70-1	元禄 12 (1699)	10.86	10.86	—	切妻造 一部2階建	棧瓦葺	鼠漆喰	重要伝統 的建造物 群保存地 区特定物 件
座敷		弘化 3 (1846)	9.05	7.24	—	寄棟造	棧瓦葺	荒壁	
主屋		明治時代	3.62	3.62	—	切妻造	棧瓦葺	鼠漆喰	

⑥ 三遷堂

名称等	所在地	建築年代	桁行 柱間 (m)	梁間 柱間 (m)	建築 面積 (㎡)	構造/形式	屋根	外壁	指定等
主屋	日田市 城町 一丁目 286-1	18世紀 頃	5.43	12.67	—	寄棟造	茅葺	モルタル	重要伝統 的建造物 群保存地 区特定物 件

(ウ) 地下遺構

① 長福寺学寮跡

名称等	所在地	建築年代	桁行 柱間 (m)	梁間 柱間 (m)	建築 面積 (㎡)	構造/形式	屋根	外壁	指定等
学寮跡	日田市 豆田町 53-2	宝暦 9 (1759)	4	6以上	—	—	—	—	重要伝統 的建造物 群保存地 区特定物 件

※すべての建造物等が重要伝統的建造物群保存地区内の範囲内である。

※廣瀬窓淡旧宅は史跡「廣瀬窓淡旧宅及び墓」(昭和 23 年 1 月 14 日史跡指定；廣瀬窓淡及び歴代塾主とその家族の墓，平成 25 年 3 月 27 日追加指定；廣瀬窓淡生家)内である。

表 2-5 弘道館の主たる構成要素

(ア) 当初建造物

名称等	所在地	建築年代	桁行 柱間 (m)	梁 間 柱 間 (m)	建築 面積 (㎡)	構造/形式	屋根	外壁	指定等
正門	水 戸 市 三 の 丸 一 丁 目 119 番	天保 12 (1841)	3. 67	3. 09	11. 34	四脚門切妻造	本瓦葺	—	重要文化財
正門附塀			正門南 10m, 北 11. 4m				棧瓦葺	一部 RC 造	
正庁			主部 22. 90	主部 10. 50	471. 91	入母屋造	棧瓦葺	板 漆喰	
			式台 5. 73	式台 5. 73			棧瓦葺 底部柿葺	板 漆喰	
			正庁 5. 73	正庁 10. 50			棧瓦葺	板 漆喰	
			湯殿・便所 7. 57	湯殿・便所 5. 73			棧瓦葺	板 漆喰	
			主屋 18. 13	主屋 10. 57	264. 63		寄棟造	棧瓦葺	
北方 突出部 4. 77			北方 突出部 9. 54			板 漆喰			
便所 4. 77			便所 1. 90			板 漆喰			
番所				5. 55	2. 68	14. 87	切妻造	瓦葺	
弘道館記碑		碑身高 3. 28m, 碑身幅 1. 92m, 碑身厚 0. 58m, 台座高 0. 61m, 台座幅 3. 05m, 台座厚 1. 51m					—	—	
孔子廟戟門 脇土塀		2. 45	1. 97	4. 83	四脚門切妻造	本瓦葺	—	—	
要石歌碑	三の丸 一 丁 目 119番5	天保 12 (1841)	碑身高 2. 0m, 碑身幅 1. 9m, 碑身厚 0. 33m					—	—
鐘楼	三の丸 一 丁 目 119 番	天保 12 (1841)	2. 18	1. 90	13. 20	切妻造	本瓦葺	—	—
種梅記碑			碑身高 1. 9m, 碑身幅 1. 0m, 碑身厚 0. 27m					—	—
堀・土塁	【西部】 三 の 丸 1丁目5番 【北部】 1丁目119番	近世初期か	西部堀幅30m, 土塁幅約 30m 土塁総延長 240m, 比高差 13. 7m					—	西部は茨城県 指定史跡「水 戸城跡」
			北部堀幅 2m～5m, 土塁幅13m～14m, 土塁総延長約 205m					—	

(イ) 復元建造物（昭和 38(1963)年～昭和 50(1975)年復元）

名称等	所在地	建築年代	桁行 柱間 (m)	梁 間 柱 間 (m)	建築 面積 (㎡)	構造/形式	屋根	外壁	指定等
国老詰所	三の丸 一丁目 119番	天保12 (1841)	9.55	7.65	73.05	寄棟造	瓦葺	板 漆喰	—
八卦堂			5.75	2.40	27.84	八角円堂方 形造	銅板棧棒葺	板	—
孔子廟			8.01	4.81	38.53	入母屋造	本瓦葺	板	—
鹿島神社	三の丸 一丁目 119番5		5.58	3.70	20.65	本殿 神明造	茅葺型 銅版葺	板	水戸市 指定文化財 ※移築

※西部土塁を除く建造物等が特別史跡の範囲内である。

※正庁及び至善堂，孔子廟の桁行柱間寸法・梁間柱間寸法は，両端柱間の芯々の数字である。

※八卦堂の桁行柱間寸法・梁間柱間寸法は，対面する柱間寸法と一辺の柱間寸法の芯々の数字である。

表 2-6 偕楽園の主たる構成要素

(ア) 当初建造物

名称等	所在地	建築年代	桁 行 柱 間 (m)	梁 間 柱 間 (m)	建 築 面 積 (㎡)	構造/形式	屋根	外壁	指定等
偕楽園記碑	水戸市 常磐町 一丁目 3－3	天保 10 (1839)	高さ 2.5m 幅 2.4m 厚さ 0.07～0.25m				—	—	—
表門		天保 13 (1842)	間口 2.99	控柱間 1.47	屋根面積 35.96	腕木門 切妻造 控柱付	茅葺 (袖塀 は棧瓦 葺)	附属塀の柱 間は腰高両 面板張 漆喰塗木部 は松煙塗	—
一ノ木戸門			間口 2.29	控柱間 1.10	屋根面積 13.70	腕木門 切妻造 控柱付	柿葺	—	—
中ノ門			間口 2.28	控柱間 1.05	屋根面積 21.84	腕木門 起り破風 控柱付	茅葺	付属塀は 横浅入り 脇障子形 袖塀	—
大杉森・孟 宗竹林			東西 270m, 南北 110m						—
梅林			東西 340m, 南北 200m						—
土塁			旧岩間街道沿い土塁, 全長約 350m, 高さ 0.8～1.0m						—
			園内中央土塁, 全長約 170m, 高さ 0.8～1.0m						
吐玉泉			東西 2.90m, 南北 1.85m, 高さ 0.88m, 深さ 0.2m						石は復元
水戸八景 偃湖暮雪碑		天保 5 (1834)	高さ 1.28m, 幅 1.19m 厚さ 0.10～0.17m					—	—
桜山	見川 一丁目 2－1	天保 13 (1842)	南北 50～110m, 東西 360m, 高さ 16.8～10.0m						—
丸山	見川 一丁目 2	近世初期	東西 60m, 南北 40m, 高さ約 6.0m						—

(イ) 復元建造物 (昭和 33 (1958) 年復元~平成 6 (1994) 年復元)

名称等	所在地	建築年代	桁行 柱間 (m)	梁間 柱間 (m)	建築 面積 (㎡)	構造/形式	屋根	外壁	指定等
好文亭 (何陋庵 含む)	水戸市 常磐町 一丁目 3-3	天保 13 (1842)	主部 19.50	主部 8.02	386.87	寄棟造 3階建て	柿葺	板 漆喰	—
			南方 突出部 5, 75	南方 突出部 8.02					
			北方 突出部 9.57	北方 突出部 6.70					
			西北 突出部 6.86	西北 突出部 5.74					
			橋廊下 14.00	橋廊下 1.36		両下造			
茶室待合			2.73	1.82	4.97	数寄屋 切妻造	茅葺	土	—

奥御殿			南棟 20.52	南棟 7.63	338.04	寄棟造	茅葺	— 黄土上塗	—
			中棟 8.60	中棟 5.73				紙貼り	
			東棟 11.46	東棟 6.68			柿葺		
芝前門			間口 2.27	控柱間 —	屋根面積 9.75	腕木門 切妻造	杉皮葺		—
露地門			間口 1.13	控柱間 —	屋根面積 5.84	腕木門 切妻造	茅葺	柱は櫨皮 付丸太を 掘立柱形 式で使用	
櫨門			間口 1.90	控柱間 —	屋根面積 9.66	腕木門 切妻造	杉皮葺	扉は横浅 の間に割 り竹あじ ろ組を嵌 めこむ	—

※すべての建造物等が史跡・名勝の範囲内である。

※好文亭の桁行柱間寸法及び梁間柱間寸法は次のとおり，計測した数字である。

桁行柱間寸法

主部：両端縁柱間真々，南方突出部：主部縁柱間から南縁柱真まで，北方突出部：主部柱間から北端柱真まで，西北突出部：北突出部柱真から茶室西柱真

橋廊下桁行柱間寸法：好文亭取付柱真から奥御殿縁柱真まで梁間柱間寸法

主部：前後縁柱間真々，南方突出部：両端縁柱間真々，北方突出部：両端柱間真々，西北突出部：主部柱真から茶室北柱真まで，橋廊下：両端柱間真々

※奥御殿の桁行柱間寸法及び梁間柱間寸法は次のとおり，計測した数字である。桁行柱間寸法 南棟：主屋両端縁柱真々，中棟：主屋南棟北端真々から主屋縁柱真まで，東棟：中棟東端柱真から東縁柱真まで梁間柱間寸法 南棟：主屋前後縁柱間真々，中棟：主屋東端柱真から西縁柱真まで，東棟：前後縁柱間真々